# 生命健康科学研究所紀要、第１２号の発刊によせて

生命健康科学研究所 所長　　古川鋼一

生命健康科学研究所紀要、第１２号の発刊に際して、ひとことご挨拶を申し上げます。本研究所は、2004 年 6 月に設置されて、もう１２年になろうとしております。生命健康科学部よりも先に設置されて、学部の創設の生みの親になったことを最近知りました。この１０年間以上を、紆余曲折がありながらも存在感を増しながら継続・発展してきたこと、ひとえに研究所を支えていただいた先生方や大学関係者の皆様のご尽力の賜物と、心より感謝申し上げます。

本研究所は、病気を予知･予防し、病気にならず、健康･長寿を享受し全うできる生活を目指した「21 世紀の健康を科学する研究所」として活動を進めて参りました。本研究所が目指す研究活動とは、「よりよく生きる」ことの実現に向けて、ライフサイエンスに立脚した新しい開発型科学技術の創成を図るものです。即ち、今や国民の半分が罹患する悪性腫瘍や認知症に代表される増加する神経・精神疾患、あるいは糖尿病などの生活習慣病や新型感染症など、現代の健康障害と様々な疾病を対象にして、その発症と進展のメカニズムの解明、予防と治療法の開発、および看護と介護のための新たな薬物、資材・機器科学技術、医療・看護技術ならびに関連する技術の開発と教育システムの開発に向けた研究を推進しています。それは、まさに到来しつつある超高齢化社会のニーズに応える重要なミッションに沿ったものであり、また、ヘルスサイエンス領域の新しい学生教育の発展にも資することを期待されているものです。

本研究所では、この 10 年間に二つの大型企画が文科省等により採択され、大型研究プロジェクトとして展開しました。一つは、平成 20 年に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として採択された『生活環境因子誘発性疾患の予知･予防に関する戦略的研究』であり、そのプロジェクトは独立した研究センター“ヘルスサイエンスヒルズ”として新たに展開しています。このプロジェクトでは、生活環境が誘発する疾病の予防と予知法に関する戦略的研究の国内外の研究拠点形成を目指すと同時に、本学の研究戦略の一環としてプロジェクト研究提案を行いました。もう一つは、地域医療の問題点追及、高齢者の心身病態の追求、障害者や在宅医療を支援する医療機器、介護器具、携帯治療･診断機器の開発などに関する研究をふまえて、平成 25 年度に採択された「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」であり、文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業)」の一環です。この事業では、本学と春日井市が連携し、大学の持つ人材や技術、知の資産を活用して地域再生・地域活性化に取り組んでいます。

現在、本研究所は、メディカルエンジニアリングリサーチ部門（臨床工学科中心)、一次予防教育研究部門（スポーツ保健医療学科中心)、ヘルスサイエンスヒルズ部門（生命医科学科中心)、保健看護学領域部門（保健看護学科中心）がおかれ、それぞれの部門が独自に

あるいは相互に連携を図りながら新規の大型プロジェクト獲得に向けて基礎研究に邁進しているところです。

さらに、本研究所は、生物機能開発研究所との共催による「中部大学ライフサイエンスフォーラム」を例年企画し、生命・健康科学の進歩について広く最新の知見を提供しております。本年度は第１０回のフォーラムを開催し、京都大学農学研究科の阪井康能教授に「細胞内の可視化を通して分かったこと役立てること」、三重大学医学系研究科の珠玖 洋教授に「複合的がん免疫療法の開発を目指して」というテーマで講演をしていただきました。講演内容の一部を紀要に掲載致しました。

以上、述べてきた本研究所の活動実績を鑑みるに、本研究所が生命健康科学部の研究を牽引する拠点となってきたことが示されている様に思われます。とくに、若手研究者や大学院生の成長の場としての使命は、今後益々重みを増していくものと予想されます。これらの研究所の活動の学内外への紹介とともに、大学院生、学生教育への一助とするために、この紀要がお役に立てばと願っております。

多くの方々にご高覧いただき、今後の本研究所の活動にご助言と一層のご支援をいただきますようお願い申し上げます。